

青年の敬語使用に関する研究

廣 兼 孝 信*

A Study on the Speech Style of Adolescents

Takanobu HIROKANE

近年、各方面から話し言葉を中心として「日本語が乱れている」という指摘が数多くなされている。それは、特に敬語の使用に顕著に現われていると言われる。敬語は日本語における独特の表現方法であり(荒木, 1983¹⁾など)、わが国では、言語的コミュニケーション(会話、文書など)を行う際には敬語を使うべきであるという1つの社会的ルールが存在してきた。たとえば、年少者が年長者に対するときや店員が客に対するとき、あるいは相手に関係なく公式の場などでは、敬語表現をすべきであると考えられてきた。しかし、近年その社会的ルールが変容し、敬語はせいぜい「です」「ます」といった丁寧語のみが用いられるに過ぎない状態になった。この傾向は特に若年層で顕著に見られ、寿岳(1981)²⁾は、その現状を「敬語的現象の衰退」、「敬語の使用状況の貧困化」と表現している。敬語とは、話し手(または書き手)と相手と表現対象(話題の人自身またはその人に関する物・行為など)との間の地位・勢力・尊卑・親疎などの関係について、話し手(または書き手)が持っている判別を特に示す言語表現(広辞苑, 1983)であり、大まかに、尊敬語、謙譲語、丁寧語の3つに分けることができる。そのうち尊敬語とは、表現対象を高める表現であり、「くださる(与える)」、「おっしゃる(言う)」、「○○のご本(○○の本)」などがこれにあたる。また謙譲語とは、表現対象を低める表現であり、「申す(言う)」、「うかがう(行く)」、「私などは(私は)」などがこれにあたる。さらに丁寧語とは、コミュニケーションの相手への配慮や敬意の表現であり、「そうです(そうだ)」、「あります(ある)」、「見てください(見る)」などがこれにあたる。

ところで、これらの尊敬語、謙譲語、丁寧語はいずれも、他者への配慮を表現しているものである(寿岳, 1981)。すなわち、コミュニケーションの対象に対して敬語表現をするということは、受け手を一人の人間として尊重し敬意を持っているのだという意志の存在を意味している。たとえば、子どもに対して「小遣いをやろう」というよりも「お小遣いをあげよう」という方が、その子どもをより尊重していることになる。しかも、「○○が来た」というよりも、「○○さんがいらっしゃった」、「○○さんがいらっしゃいました」というように敬語を重ねるほど相手に対する尊重度や敬意度を高めることができる。一方、敬語表現をされた側(コミュニケーションの受け手)は、自分自身に対する送り手の敬意を認識し、返報性の規範に従って、その送り手に敬語表現で対応することになる。このように、言語的コミュニケーションにおける敬語表現は、送り手と受け手が互いに尊重し合うというコミュニケーションが円滑に行われるための前提を作り出すものである。日本語が敬語体型をもつということは、非言語的コミュニケーションをあまり使用しないといわれる日本人(Argyle, 1975)³⁾が、その独特の文化のなかで培ってきた、円滑なコミュニケーションを行うための1つの技法であるかもしれない。この点に関して宮地(1983)は、敬語を「礼の言葉」と表現している。つまり、敬語は礼儀として使われ、敬語を使う人は礼儀正しいと判断されるわけである。そのように解釈すれば、言語的コミュニケーションにおいて敬語表現をするか否かは、相手に対する人格の評価と関係することになる。以上のことから、敬語表現は対人関係の展開を規定すると考えられる。また、近年巷間でよくいわれる「世代間」の断絶も、こうした敬語表現の衰退に原因があるかもしれない。このことに関連して、藤

* 広島文化女子短期大学

原 (1983)⁴⁾ は、言葉の使い方において保守的傾向を帯びざるをえない年長者層の人々にとって、今の年少者層の言葉使いには多くの注文や要求があるに違いないと述べている。年少者が年長者に対して敬語を使わないとすれば、その年長者はその年少者に対して非難したり人格的な評価を下げたりするであろう。かくて、「敬語の使用状況の貧困化」によって異世代間の人間関係に摩擦が生じるであろうことが容易に想像される。

それでは、外国語の場合、このような対人関係にかかわる表現はどのようになされているのだろうか。日本語に多大な影響を与えた中国語では、「〇〇さんが来る」という場合に「来 (lai)」「来臨 (lai lin)」「駕臨 (jia lin)」といった表現をし、それぞれ相手に対する敬意度が異なる。しかし、丁寧な表現は公式の場でしかされず、日常会話では表現対象にかかわらず「来 (lai)」が使われる。そして「行く」という場合にも「去 (qu)」といい、日本語の「参る」や「うかがう」といった謙讓語にあたる表現はない。また英語でも表現対象にかかわらず「来る」や「行く」を「come」「go」といい、尊敬語や謙讓語にあたる表現がない。ただし、誰かに時間を教えてほしいときには“Tell me the time.”というよりも“Can you tell me the time?”のように間接的に要求する方がより丁寧であると認識され、“May I ask you what time it is?”のように相手に許可を求めるような表現は、非常に丁寧であると認知される (Clark & Schunk, 1980)⁵⁾。英語では他者に対して何かを要求するような場合には、このような謙讓的とも呼べる表現が望ましいとされている。一方、朝鮮語では日本語よりもはるかに複雑な敬語表現があり、その使い方が対人関係を大きく左右するといわれている (南, 1987)⁶⁾。このように、外国語の場合も多かれ少なかれ表現対象やコミュニケーションの状況を考慮して言葉を選択しなければならない。しかし、日本語が他の言葉と比して難しいといわれるのは、他国で丁寧な表現が必要とされる状況が相手が年上であったり相手に何かを依頼するようになるときに限られているのに対し、日本では互いの地位関係、年齢、状況などすべて考慮して言葉を選択しなければならない点であろう。

さて、日本語では敬語表現が対人関係を左右する1つの重要な要因であると考えられるにもかかわらず、何故「敬語の使用状況の貧困化」といわれる状況が生じてきたのであろうか。

文部省の小学校指導書国語編によると、1年のとき、

「です」、「ます」という丁寧語に気づかせて慣れさせることに始まり、4年までに必要に応じて敬語 (尊敬語、謙讓語は含まれない) が使えるようにさせ、丁寧語に関する指導を終える。そして、5年、6年でそれぞれ尊敬語と謙讓語を教え、最終的にそれらの使い分けができるように指導するとなっている。これに関して村上 (1985)⁷⁾ は、小学校の段階ですでに年長者に対して敬語を使うべきであるという考えを持っていると報告している。したがって、敬語の果たす役割やその基本的な使い方、および年長者などに対して敬語を使うべきであるという社会的ルールは、比較的早い段階で学習されていると考えられる。しかし一方では、「これからの敬語」という建議が1952年に国語審議会によって文部省に提出され、1) これまでの敬語は、旧時代に発達したままで必要以上に煩雑な点があった、これからの敬語はその行き過ぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明簡素にあたりたいものである、2) これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、基本的人権を尊重する相互尊重の上に立たなければならない、という基本方針のもと敬語表現の簡素化が図られたことを契機として、敬語は「です」、「ます」のような丁寧語だけを使えばよいといった考え方が広がってきたということも考えられる。事実、廣兼 (1985)⁸⁾ は、大学生を対象として調査を行い、年長者に対して尊敬語、謙讓語、丁寧語を複合させた表現よりもいずれか単独で表現する方が適切であるという認識の存在を確認している。また荒木 (1983) も、生徒が教師に対して敬語を使わなくなった現状を指摘し、それをよしとする風潮が教師の側にも社会の側にもあると述べている。しかし言うまでもなく、現代の言語的コミュニケーションにおいて敬語表現が消滅したわけではない。敬語表現をしなくなったといわれる若年層も状況によっては積極的に敬語表現をしようとしているようである。

敬語表現はもともとコミュニケーションの受け手を尊重しようとする心理から生まれたものと考えられるが、岡本 (1986)⁹⁾ が疎遠な同年代の人に対して何かを依頼するときには敬語表現が比較的多く、心理的に近い人に対しては少ないと報告しているように、現代では特に若年層で敬語表現の心理的意味が変化してきているように思われる。したがって、状況によって敬語表現をしたりしなかったりするのは何故か、すなわち、その裏に存在する心理的意味は何かということであらためて検討する必要があると考えられる。それは、

「乱れてきた」といわれる現代における言語的コミュニケーションに対する理解を深めることになると考えられる。

そこで本研究は、まず、敬語表現が言語的コミュニケーションを行う2者関係や対人印象とどのように関連しているのかという側面から、現代の青年が敬語表現をする心理的意味を検討することを目的としたものである。

方 法

被調査者 専門学校女子学生54名。

発話場面および発話内容 言語的コミュニケーションを行う2者(話し手と受け手)として、従来から敬語表現をすべきであると広く考えられてきた年少者と年長者の関係をとり上げ、被調査者にとって比較的身近な年長者という理由から、年少者として被調査者と同年・同性の学生(以下、話し手)、年長者として男性教師(以下、受け手)を想定した。そして発話場面は、次の2場面を設定した。1)廊下で教師に級友の居所を尋ねられ、知らないと答える場面—具体的には、「ある学生(あなたと同年齢、同性)が、学校の廊下である先生(男性)に呼びとめられて、同じクラスのAさんの居所を尋ねられました。しかし、この学生はAさんの居所を知らなかったので、「……」と答えました。」という設定にした(以下、「応答」場面とする)。2)授業中に教師に質問され、その質問の繰り返しを要請する場面—具体的には、「ある学生(あなたと同年齢、同性)が、授業中ある先生(男性)に質問されました。しかし、この学生はよく聞きとれなかったので「……」と言いました。」という設定にした(以下、「要請」場面とする)。発話内容は、各場面とも3つ用いた(Table 1 参照)。それぞれ内容は同意であるが敬語を複合させることによって丁寧さの程度を

Table 1 想定された状況

場面	発話内容
応答	a. 存じません。
	b. 知りません。
	c. 知らない。
要請	a. もう一度おっしゃっていただけませんか。
	b. もう一度言って下さいませんか。
	c. もう一度言ってくれませんか。

変えた。すなわち、「応答」では、「存じません」が謙讓語+丁寧語、「知りません」が丁寧語のみ、「知らない」が普通語で構成されており、「要請」では、「もう一度おっしゃっていただけませんか」が尊敬語+謙讓語+丁寧語、「もう一度言って下さいませんか」が丁寧語+丁寧語、「もう一度言ってくれませんか」が丁寧語のみで構成されている。

調査内容および手続き 調査はすべて、小冊子によって行い、場面(2)×発話内容(3)の6つの状況を文章によって呈示した。呈示順序は、被調査者の半数に対して「応答」の場面の3つの発話内容を先に、

Table 2
話し手と受け手の関係に関する項目のバリマックス回転後の因子負荷行列

項 目 [†]	因子負荷量	
だらしない—きちんとした	90 ^{††}	22
けじめのない—けじめのある	88	21
年の離れた一年の近い	-80	-36
緊張した—リラックスした	-75	-49
重苦しい—気楽な	-72	-57
甘えのある—甘えのない	71	51
暖かい—冷たい	19	84
なごやかな—とげとげしい	20	79
よそよそしい—親しい	-52	-72
話す機会の多い—話す機会の少ない	56	68
深い—浅い	49	64
因子名	秩序性 親密性	

[†] 1項目削除 ^{††} 小数点は省略

Table 3
話し手の受け手に対する印象に関する項目のバリマックス回転後の因子負荷行列

項 目 [†]	因子負荷量	
話しにくい—話しやすい	-90 ^{††}	08
親しみやすい—親しみにくい	89	-08
物分りのいい—頑固な	86	-18
怖い—優しい	-85	-07
若い—年とった	79	36
尊敬できない—尊敬できる	02	83
敬意を持てる—敬意を持ってない	18	75
因子名	親和性 尊敬性	

[†] 3項目削除 ^{††} 小数点は省略

残りの半数に対して「要請」の場面の3つの発話内容を先に呈示し、発話内容の順序は各場面とも6通り(ほぼ同数となるように)作成した。ただし、一人の被調査者内で2つの場面における丁寧さの程度の順序が同じにならないように工夫した。そして状況ごとに、1)その話し手と受け手がどのような関係にあるか(12項目, Table 2 参照), 2)その話し手が受け手に対してどのような印象を持っているか(10項目, Table 3 参照)を推測させ、SD法により6点尺度で評定させた。

結 果

話し手と受け手の関係および話し手の受け手に対する印象の因子の抽出 とともに、2(場面)×3(発話内容)×54(被調査者)=324サンプルとして12×12および10×10およびの項目間の相関を求め、因子分析の入力データとした。次に、SMC(squared multiple correlation)によって共通性の初期値を推定し、共通性の反復推定を行いながら主因子解法により因子を抽出した。第1回目の因子抽出の打ち切り基準を固有値 ≥ 1.0 としたところ、それぞれ2因子を抽出したが、因子構造を単純化するためにさらにバリマックス回転を施した。そして、話し手と受け手の関係については、第1因子(6項目)で「だらしない—きちんとした」、「けじめのない—けじめのある」、「年の離れた—年の近い」などの項目の因子負荷量が高く、「秩序性」と命名し、第2因子(5項目)で「暖かい—冷たい」、「なごやかな—とげとげしい」、「よそよそしい—親しい」などの項目の因子負荷量が高く、「親密性」と命名した。また話し手の受け手に対する印象については、第1因子(5項目)で「話しにくい—話やすい」、「親しみやすい—親みにくい」などの項目の因子負荷量が高く、「親和性」と命名し、第2因子(2項目)で

「尊敬できない—尊敬できる」、「敬意を持てる—敬意を持ってない」という項目の因子負荷量が高く、「尊敬性」と命名した(Table 2, Table 3 参照)。

発話内容の因子得点の比較 まず、話し手と受け手の関係について、場面(2)×発話内容(3)×因子(2)ごとに各被調査者の因子得点(各因子内の項目の評定値を方向性をそろえて合計し、その項目数で割った値)を算出した。そしてその因子得点を従属変数として場面×因子ごとに発話内容に関する1要因の分散分析(被験者内)を行ったところ、いずれも有意なF値が得られた($p < .01$)ため、それぞれテューキー法によって多重比較(有意水準は、いずれも1%とした)を行った。その結果、「応答」、「要請」の両場面とも、丁寧さの程度が増すほど「秩序性」は高く、逆に「親密性」は低く評価されていた(Fig. 1, Fig. 2 参照)。次に、話し手の受け手に対する印象についても同様に因子得点を従属変数として場面×因子ごとに発話内容に関する1要因の分散分析(被験者内)を行ったところ、いずれも有意なF値が得られた。($p < .01$)ため、それぞれテューキー法によって多重比較(有意水準は、いずれも1%とした)を行った。その結果、「応答」、「要請」の両場面とも、丁寧さの程度が増すほど「親和性」は低く、逆に「尊敬性」は高いと評定されていた(Fig. 3, Fig. 4参照)。ただし、「応答」の場面では「知りません」と「知らない」との間で、「要請」の場面では「もう一度おっしゃっていただけませんか」と「もう一度言って下さいませんか」との間で、それぞれ「尊敬性」に有意な差がみられなかった。

考 察

本研究は、現代日本文化における若者の言語的コ

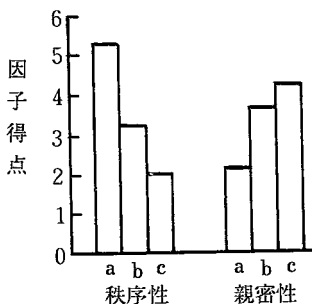


Fig. 1 「応答」における話し手と受け手の関係の因子得点

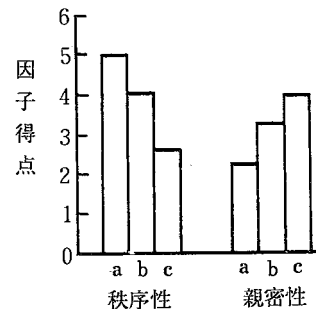


Fig. 2 「要請」における話し手と受け手の関係の因子得点

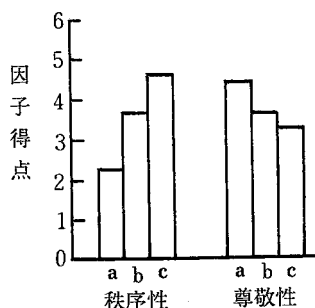


Fig. 3 「応答」における話し手の受け手に対する印象の因子得点

コミュニケーションの中で、敬語表現がどのような心理的意味を持っているのかを検討することを目的としたもので、本報告は、年少者から年長者へ言語的コミュニケーションを行う際の2者の心理的関係と敬語表現との関連性および話し手の受け手に対する印象と敬語表現との関連性を検討したものである。

その結果、判明したことから次のようなことが推測される。1)年長者と堅苦しい関係にあるほど、尊敬語や謙譲語を含む丁寧さの程度の高い言葉が使われる。2)年長者と親しい関係にあるほど、丁寧さの程度の高い言葉が使われない—すなわち、丁寧語のみを含む程度の言葉が使われる。3)年長者に対して親しみが感じられるほど、丁寧さの程度の高い言葉が使われない。4)年長者に対して敬意が持たれているほど、丁寧さの程度の高い言葉が使われる。これらを要約すれば、年長者に対してどんな場合においても敬語（特に、尊敬語や謙譲語）を使うべきであると考えているというよりも、当該の年長者が心理的に近い存在であると感じているときには、あえて丁寧さの程度の高い敬語を使うべきではないと考えているといえよう。言い換えれば、年長者に対して敬語を使わないということは、当該の年長者に対する親和を意味するといえるのかもしれない。これに対して、表現の丁寧さの程度と話し手の受け手に対する尊敬語との関連性は、親和度との関連性ほど明確なものではないことが判明した。このことから、敬語表現をすることが文字通りコミュニケーションの相手に対する尊敬を意味するとはいえないようである。

一方、言語的コミュニケーションの受け手が、自分に対して敬語表現をされないときその送り手に対してどのような印象を持つかについては、その判断の1つの手掛りとして表現の丁寧さとそのような表現をする

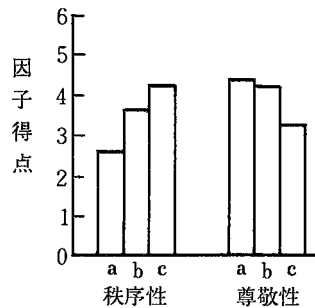


Fig. 4 「要請」における話し手の受け手に対する印象の因子得点

話し手に対する好感度と関連性を調査した。対象は女子大学生、女子短大生、女子専門学校生111人で、「～していただけませんか」、「～してもらえませんか」、「～してよ」のように相手に何かを要請する37個の表現と、「存じあげておりません」、「知らないんですけど」、「わからん」のように相手に否定的応答をする34個の表現について、その丁寧さ、好感度、および使用度を7点尺度で回答させた。その結果、表現の丁寧さの程度が高いほど、話し手に対する好感度が高いことが判明した (Table 4 参照)。このことから、もし敬語表現をしなければ相手に悪い印象を持たれるであろうということが予想されるが、実際の使用度と好感度との関連が低かったことから、コミュニケーションの相手から好感を持たれたいといった印象管理的な動機はあまり働いていないといえよう。

Table 4
丁寧さ、使用度、好感度の関係

関係対	「要請」	「応答」
丁寧さ-使用度	026 [†]	211
丁寧さ-好感度	725	788
使用度-好感度	079	283

[†] 相関係数 (n=111, 小数点は省略)

以上の結果から、言語的コミュニケーションの中で敬語表現をするか否かは、コミュニケーションの対象に対する親和性と強く関係があると考えられる。このことは、同性で同年齢の他者に何かを依頼するときの表現が相手との親疎によって敬語表現になったり普通体になったりする、という岡本 (1986) の結果によっても裏づけられる。しかし、本研究で取り上げた状況や表現はごく限られたものであり、そこでの対人関係

も教師と学生のみなので、本研究の結果から言語的コミュニケーションの中での敬語表現の心理的意味を結論づけることはできない。本研究の結果はあくまでも1つの示唆を与えるものにすぎない。今後は、多様な状況や表現、さらには対人関係について検討していくことはもちろん、調査研究だけでなく実際の行動レベルを捉える必要がある。

引用文献

- 1) 荒木博之 1983 敬語日本人論 二十一世紀図書館
- 2) 寿岳章子 1981 子どもにとって敬語教育とは何であるか 児童心理, 35, 2159-2164.
- 3) Argyle, M. 1975 *Bodily communication*. London: Methuen.
- 4) 藤原 宏 1983 ことばに節度を 児童心理, 37, 285-291.
- 5) Clark, H.H. & Schunk, D.H. 1980 Polite responses to polite requests. *Cognition*, 8, 111-143.
- 6) 南不二男 1987 敬語 岩波新書
- 7) 村上京子 1985 児童の敬語規範の獲得 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 246-247.
- 8) 廣兼孝信 1985 年長者に対する年少者の話しことばのルールに関する研究—言葉の適切さと丁寧さの関連性と中心として—広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集, 11, 87-93.
- 9) 岡本真一郎 1986 依頼の言語的スタイル 実験社会心理学研究, 26, 47-56.

Summary

The purpose of this study was to investigate the speech style of adolescents, especially, the relation between the speech style and the interpersonal relations or interpersonal impression.

Results indicated that the speech to the elder in a formal relationship was more polite, the speech to the elder in a informal relationship was less polite, the speech was less polite when felt intimate for the elder, and the speech was more polite when respected to the elder.